

Essay Title: 「ジャーナリスト」から「研究者・教授」へのキャリアの大きな転換

「ジャーナリスト」から「研究者・教授」へのキャリアの大きな転換

当時、米国コロンビア大学のジャーナリズムスクール(修士課程)を修了してから5年ほどがたっていた。日本ではWindows95が導入される直前で、まだWindows 3.1の時代ではあったが、職場にも朝日ネットが既に導入され、インターネットが使えるようになっていた。当時務めていた朝日新聞の英字紙 Asahi Evening News は主として日本に住む外国人向けの媒体で、インターネット黎明期の当時はまだそれなりの読者を確保していた。しかしながら、今後インターネットの普及により英字新聞離れが起きるのは時間の問題だった。

こうした環境を鑑みて、再度米国の大学院に行くことが目標となった。すでにコロンビア大学で学んだ経験があるということで、米国のハーバード大学のケネディスクールを目指すこととした。コロンビア大学を修了したのだからということで無謀にもハーバード大学一本に絞り、アプリケーションを書いた。偶然にもハーバード大学からアクセプタンスが舞い込み、1995年9月に渡米した。

ハーバード大学ケネディスクールでの学校生活は、「目眩く」日々であった。世界的にも著名な教授陣による授業も素晴らしかったが、「フォーラム」と呼ばれる全学生向け講演会が随時開かれ全米中のみならず世界中から政治・経済・社会をけん引する第一線のスピーカーが招かれて学生と一対一の議論を行う機会だった。留学した年が大統領選予備選の年だったので、予備選が初めに始まるニューイングランドへ行って選挙演説を見学したり、当時大統領だったクリントン陣営の州の選挙勝利パーティに参加したりワクワクする1年間を過ごした。

ハーバード大学での学びから、政策や戦略立案に興味を持つようになり、帰国後、文部科学省科学技術政策研究所や理化学研究所、東京工業大学産学連携本部を経て現在の大阪大学の教員ポストを得るに至った。その間東北大学の工学研究科技術社会システム専攻で博士(工学)を取得した。

現在は大阪大学の高等教育・入試研究開発センター教授として、大阪大学を受験する留学生の入試にかかわる一方、イノベーション関連の授業を英語で主として留学生向けに教えている。また足元成長が著しい途上国・新興国の知的財産権の在り方を研究の1つの柱に立てて、インドやバングラデッシュ、フィリピンやブラジルなどを対象として研究を進めている。その一方再生可能エネルギーを使った地域活性化事業のインパクト分析も行っている。また今年からはAIを使った研究にも着手する計画である。

振り返るとハーバード大学ケネディスクールでの学びがキャリアを「ジャーナリスト」から「研究者・教授」へと大きく転換させたきっかけとなった。当時の上司からは、会社を辞めたら、もう2度と会社には戻れないぞとおどされたが、そこでの決断が必要だった。

まだ人生が終わったわけでもなく、果たして当時の決断が正解だったのか不正解だったのかはわからない。しかし人生は一度しかなく、自分以外だれも責任を取ってはくれない。大きな決断が迫られるときには自分を信じるしかない。(了)